

座談会

福生町青年団

出席者

橋本孝蔵 森田正 竹島益夫 石川保 村野晋三 平井賢治 細瀨万吉 野崎博 設楽清一

(以上元団長・就任順)

岩下伴蔵 山崎良之助 石川昌一 篠崎久治

司会と記録 山崎茂男

(文中、敬称略)

はじめに

明治のはじめ、新しい教育制度ができて、子どもたちは義務教育を受けるようになった。それ以前から、書生さんたちは、それぞれに塾教育などされてきたものである。

一般若者は、それまでに教育を受ける機会もなく過ぎ新しい教育制度からはみ出していた。これら勤労する若者は、いわゆる青年扱いはされず、当時の青年とは、書生さんたちのことであ

った。

しかし、広島県の小学校の先生であった、山本瀧之助氏は、すべての若者は青年の名によって呼ばれなければならない、として、自然発生的に各村落に存在していた若衆組、若者連中を近代的に組織して、公民教育、社会奉仕活動の団体としての機能を与え、また同時に『田舎青年』なる雑誌を出版して、青年の啓蒙に努めた。これを契機として、若者組と称せられた全国の青年組織は、青年会、または青年団と言う名の下に近代化され、発展していった。

また明治の初期、教養の低かった田舎青年に、新しい公民としての自覚を与え、地方自治の基盤づくりの人格形成に役立ったことは、言うまでもない。

明治時代、戦争のたびに青年団の組織は固まっていた。内務省は、地方自治をすすめる上で青年団に力を入れた。文部省も教育の面から、それ以上に青年団に力を入れた。

満州事変の時から、軍も青年団に食指を動かし始めた。しかしながら、青年団の本質はゆがめられることなく、青年団の自主性はその後も堅持されてきた。

昭和十六年一月十六日、従来の青年団は解体されて、大日本青少年団となった。青年の自主性はとりあげられ、町長や学校の校長が団長に就任した。

それらの表面だけを見た人には、かつての青年団は官僚的で軍国的だった、と見る人が多いが、それはこのような時代の背景の中で組織として表面化していたものだけをさして言われたこ

とであった。

(以下、『福生町誌』による)

「福生村青年会は古く組織されていたが、青年団として男女合同したのは、福生・熊川共に大正十四年ごろである。

福生村青年団は、当時青年会長であった古谷幸三郎氏を中心に、青年クラブの建設を計り、第二水道の事務所の建物の払い下げを受け、それに一部二階をつけ現在の位置に(いまのコヤマ店員寮、一小前)建設。資金は寄付金に頼らず、田村半十郎氏より二千百円を年利八分で借り、青年の力でクラブの建設を行なった。

(中略)

昭和初期の青年団の活動は非常に活発で、体育面では特に陸上競技は盛んに行なわれ、郡青年団運動会、あるいは近村の運動会に参加し、多くの成果をあげていたし、また武道(柔、剣道)においても、特に福生の青年は活躍していた。一夜講習会は青年の心のより処を求めて盛んに開催され、多くの団員はそれにより自らの向上に務めていた。

昭和十四年、次第に戦時体制が強化され福生に航空審査部が設置されるとき、青年団もその測量に約一カ月間出動した。これより、急激に団も戦時体制に入り、団服着用も統一され、早朝動員大会等、次第に回を重ねるようになり、また支部の活動も強化されてきた。

昭和十五年、福生町が誕生したが、青年団は福生・熊川合同することなく、ただお互いに連絡を密にしてやがて合同への準備を進めていたとき、昭和十六年、官制の大日本青少年団が生まれ、原則として青年学校が主体となり、団員は普通団員二十歳まで、幹部団員二十五歳までとなり、組織は一変してここに長い歴史を持った青年団は一応、形の上では終りを告げた。

◎歴代団長

古谷幸三郎、笹本益夫、田村富十郎、田村謙三、井上光彰、秋山誠一、秋山猛、森田新平、内田勇、橋本孝蔵の各氏。(福生青年団)

野島毎、天野玄弘、石川真作、斎藤菊蔵、野島茂雄、石川常太郎、石川喜八、石川武雄、森田誠策の各氏。(熊川青年団)

なお、福生町の青年団、いや西郡の青年団で忘れることの出来ないのは、石川弥八郎氏(真作)の活躍で、熊川青年団長から郡団長等、ほとんどその半生を青年団運動に捧げられ、若者の指導に当られた。当時の青年団は、ほとんど氏の指導を受け、育てられた人々である」

敗戦直後

昭和二十年八月十五日。日本は太平洋戦争に敗れた。

その半月ほど前の、福生の八雲神社の祭礼でのこと、もう戦争は敗けたなあ、と誰言うとなしに、人々は感じていた。

一部で、せっぱつまった戦時下のこと、祭礼を自粛などの声もあったが、福生地区の青年は、やけっぱち気味に御興をかついだ。

司会 まず、そんな敗戦直後の青年団の姿から話を進めてもらいましょう。

山崎 なにしる団員だったて、十代の者ばかりになっちゃった。本町全部で二十五、六名だっただろう。分団長さえ十代だったもの。みんな戦場へ行ってたからなあ。

(以下、山崎とあるは山崎良之助)

橋本 小学校の庭へ御興を集めて、そこから福生の中をねり歩いたもんだ。

山崎 その時、井上重男が陸軍少尉の軍服で軍刀をさげてきて、

「御興というのはこうやってかつぐもんだ。元氣を出せえ」なんて「カツ」をいれてた。

森田 熊川の方は自粛しようってんで、かつがなかったんです。

山崎 その日に、米軍が三多摩地区を空襲するっていう情報が入ってた。それで御興は夕方にはおさめてしまったが、その夜、本当に大空襲があつて八王子がやられた。そのついでに熊川も何カ所か焼夷弾を落とされた。

そうれみろ、御興のたたりだぞ、なんてやってたな。

そして敗戦。それから、誰もが何もかも空白の時を過ごす。若い者も同じだった。

(以下、石川は石川保、石川昌は石川昌一)

竹島 ここらの若い者はね、いくらか元氣があつた。青年団も分団によっては少しずつ何かやってたところもあるよ。

村野 俺が復員してきたのは九月だった。途中で、妙なことをやってるなと見たのが、青年団の素人演芸会だった。

石川 ずいぶんはやったものな。この中にもそのころの名優がいるよ。

山崎 その年の十月だったろう。俺と井梅伊助と、細谷利男の三人で大久野へ出かけた。恩師の細谷勇太郎先生が、向うの青年の指導をしていると聞いて、交流に出かけた。

たしか、雪が降り出して、寒い寒いとふるえながら大久野へいったんだ。

それから平井に行き、東秋留と話し、そんなことから郡内の青年の動きが目立ってきた。それぞれの団の幹部とこの問題についてずいぶん語りあったものだ。

橋本 その語りあいをかかさず記録して、それを各地の青年団に発送してくれたのが、岩下先生だ。その記録に刺激されて動き出した青年も多い。

司会 いま私を持っている『多摩の礎』にその座談会記録のつてますよ。二十一年から二年ごろ発行のものだね。これは当時の団報ですか。細谷利男がよくこのガリを切ってた。

石川 表紙だとか、こみいった文章のところは、岩下先生がやってくれたそうだね。

福生・熊川両団の合併

司会 そのころまで福生町の中で、福生青年団と熊川青年団になってたそうですね。福生は昭和十五年に福生・熊川両村が合併して町になったのだが、青年団は合併をこの時期までのぼしてきてしまったわけですか。

森田 いままでのような形では、今後の発展に支障があるということで、両団の幹部がたびたび交流して、その気運が盛りあがってきたのです。そのころの私の記録によれば、九月十八日と二十三日にその準備会がありました。そして二十八日に役員会を開いています。十月早々に合併が実現し、団長には橋本孝蔵が就任しました。十月十六日にはその福生町青年団初の行事である青年団体育祭を福生国民学校（一小）でやったと記録されています。

石川（昌） 郡団の結成の動きとほとんど一しよだったな。そのころから分団制を支部制にした。熊川の南から一支部となった。団長も両方から交互に出す。会合も、福生と熊川のクラブを交代で使った。

福生から熊川へ、熊川から福生へと会場がかわるので、女子青年が夜出かけるのは不安があった。米軍が入ってきて、婦女子の夜間外出は危険だといわれたんだよ。それで男性は、女子青年の護衛役をかって出た。これが楽しかったようだなあ。（笑い）

橋本 “リングの歌”というのがはやってたんだよ。若い者が集まって歌をうたうとなるとつい、軍歌になってしまう。俺が拝島の大師様へ初詣りにいく時に、ぶらぶら歩きながら、歌詞を考えた。NHKの音楽部長をしていた友だちに、それを編曲してもらったんですよ。

そして、軍歌のかわりにうたおう、なんてその歌を歌い出した。それがいつの間にか福生青年団歌になってしまったな。

“理想の下に”

多摩の流れは清くして

昨日も今日も変わらねど

歴史は巡る 昨日今日

富と私欲の支配する

古き日本よ いざさらば

自由は今や 我にあり

理想の下に いざゆかん

というのがその歌の一節です。

熊川の動き

司会 熊川青年団の戦後を話してください。

森田 俺が復員してきてから、今の若者の動きをとても気にしていた。新聞に出る「若い人の問題」なんていう記事には、特別に注意して見てました。それから一人で考えてたってしようがないと、並木嶋雄先生のところへ遊びにいつて、先生からいろいろ助言を得た。そして、熊川の若いもんによびかけて、青年団結成となったんですよ。その時、熊川のクラブへ五十名の男女が集まって準備ができた。皆の話し合いで私が団長、副団長に乙津義男ということになった。

それからたびたび青年で集まって議論しました。その真剣ぶりに感心したといつて、石川弥八郎氏が我々の中に入ってきてくれました。

石川さんの紹介でNHKのラジオから、二十一年の五月六日に熊川青年団が全国に放送されました。取材にこられたのは四月二十五日です。青年がクラブに集まって、将棋をさしたり、議論したりしている。その中へアナウンサーが入ってきてその様子を放送した、というようなことでした。進駐軍のピッカリングという将校が二人連れできたんだ。農村の青年の悩みなんていうのを、大いに訴えたと思いますよ。

それから二十一年の四月二十日に素人演芸会をやつて、翌日になつてしまつて、二時半までお客が帰らなかつた、と書いてありますよ。

細淵 そのころの娯楽としては、素人演芸会が幅をきかしてました。神社の庭でやつたんですね。有志からの寄付金もあつてね、これが団の資金にもなつた。

森田 ガリ刷りの会報も出したな。東山秀夫や児島春之助なんかひっぱりでだったよ。

平井 “家の光”(雑誌名)の読書会もあつて、これなんかも大勢出てたな。

森田 さきほども出たように、熊川は終戦間際に一部が空襲で焼かれたんです。その人たちのために、衣類のバザーを開いたり、クラブの前の兵舎だった建物をもらいうけて、そのトタンななかで、被災者の家の修理の手伝いを奉仕しました。

町の中へポスターをはつた。“戦災者に凍てつく冬がやってくる。救援の手を”という文句だった。それで町民にも協力を求めた。

石川(昌) 町長選挙の立会演説会を、青年団主催でやったこともあつたな。

森田 どういうわけか、ふだんはおだやかだった熊川で、祭礼という部落どうしのごたごたがあつたですよ。これでは新しい町づくりによくないからと、二十一年の祭礼から、子どもおとなの御興もみんな一しょで、御興の熊川地区一周を実行しました。これは二十二年にもやつたよ。これなんか、住民の和ということで評判がよかつたですよ。

石川(昌)

それから、熊川保育園の設置で働いたな。戦後の生活でみんなが苦しくて、働くことに追われて子どもなんかおっぱいばなしが多かったんだね。それを森田団長が心配して、なんとか都立の保育園を熊川につくってもらおう、青年団がこれを取りあげて動くことにした。団長と、当時町助役だった齋藤吉太郎さん、町議だった平井初五郎さんで、二十二年の八月十五日に都庁の民生局へ陳情書をもって出かけた。これが実って青年クラブに都立熊川保育園がまもなく設置になったんだ。

西多摩郡連合青年団発足

竹島

昔から、福生の方の青年の何よりのいい場所だった、そして研修所であった青年団クラブ(一小时前にあった)が、戦争中は陸軍の憲兵隊に使われちゃって戦後は消防署になってた。戦後、青年団がまとまってくるにつれて、あれをなんとか我々がとりかえさなくちゃあ、ということとで解放運動をやったな。やっぱりポスターをつくって町民によびかけたりした。まもなくともどせたな。

山崎

団員で、そのクラブの大掃除をやった。すすだらけになってな。その時、野島保次(笹本)が復員兵姿で表へやってきた。

「これからは若いもので、しっかりやろうぜ」ってハッパをかけられた。

橋本

農協の二階(当時は駅前、堀田薬局の隣)でハヤシの練習を始めたのもそのころだ。

篠崎

山崎(茂)が青年を集めて、ソロバン会をこのクラブでやったのもそのころだったな。

思想問題で動いていた連中(青年団とは無関係)が「不正者をあばけ」なんて駅前へ壁新聞を出したなあ。

司会

そのころ、郡連合青年団ができたんですか。

橋本

二十一年の四月に永田クラブに郡の連中が集まって郡団の団則をつくった。七月二十八日には、郡団結成準備会の団長会議を開いて団則を審議した。

八月九日には第一回の評議員会を開いている。

森田 俺のこの記録によれば、その時の熊川の評議員は、石川栄一、平井賢治、清水千代子、須崎幸子という顔ぶれだった。

そして九月八日に青梅の初音座で結成式があった。この日は快晴とこの日記に書いてあります。結成式のあと、のどじまんや演芸会をやって、賑やかだったのです。

郡団の初代団長には奥多摩の石田正義氏が就任した。郡団をまとめたのは橋本孝蔵ですよ。だから始め橋本という声が多かったが、橋本が辞退して石田氏になったようだ。

まもなく青梅の農林学校で郡の大会をやったんだ。その時、千人も郡内から集まった。盛会だったな。

ところが、都からきた織戸さんがあとでいうのに、「西多摩の青年はこれだけ集まって立派だし、行儀もよい。北多摩なんかじゃあ二百人ぐらいしか集まらない。が、北多摩の二百人というのは、何か考えて集まってくる、しんがあるというんだ。西多摩のきょうの千人は、どうも動員されて集まった感じだ」と言われたよ。

篠崎 その時の講演の中で、青年団の地域活動はもう限度だ。これからはサークル活動に変わっていくべきだ、というような話があった。

石川 いや、あれは進駐軍（アメリカ）の指導で、アメリカとしては、なんとか戦前の青年団の形を変えていかなければ、という方針から、ああいう発言をとった、ともいわれてたぞ。

青年団のさいふ

司会 青年団として活動をした、その資金の面はどんな様子でしたか。

竹島 青年団には、当時町からの補助金というようなものは出なかったよ。それまでの青年は、そういうものに頼ったらいかん、という気概もあった。が、戦後の混乱による物価高、そして若い者気質も変わってきた時勢などで、補助金なしの運営はできなくなってきたのだな。

石川 お祭りも、ある程度は、青年団の資金かせぎという一面も見られてきた。

篠崎 資金かせぎといえば、映画会をやったなあ。

一小や青年クラブでやりましたよ。『鯉名の銀平』なんかよくやった。

入場料三円だと税金がかかるので、二円九十九銭でやったりした。

平井 少しあとの代になるけど、資金かせぎで特筆すべきは、熊川の堤防工事だよ。あれは、二十二年の九月十五日に決潰した。いまの五小の下の方の堤防が、二百五十米ぐらいにわたって台風でこわされた。その工事を梅田組がやっていたが、人夫も不足気味のようだったし、いくらかなおった所をまた水でこわされるということをくりかえしたりで、はかどらなかった。それで青年団の連中が出動することになった。

一人二日ずつのわりあてで、その労賃が団の資金になった。それ以上に働きたい人は自由に人夫をやって貰い、それは自分のものになったんです。この工事は石川団長の時になって完了した。また、当時の小学校の下田先生は、この堤防決潰について青年の機関紙へ、その研究の報告文を発表しました。

森田 品評会もやっただろう。その記録もある。二十一年の十一月二十三、二十四日の両日、小学校の会場でやった、とある。

出品物は三百五十点、農作物を展示してそれを売るわけだが、売りに出して一時間でなくなってしまった。この売りあげが総額で四千二百円。

女子部はバザーをやった。さつまいもの茶巾しぼりやおでんを売った。その純益が五百円。こ

んなにもわかるものなら、あと幾日かやりたいな、なんていいあったものです。

ス ポ ー ツ

司会 スポーツの面ではどんなふうでしたか。これはいろいろあったことでしょうが。

平井 さっき出た福生・熊川合併直後の二十一年十月十六日に、体育祭をやったのが始まりだ。

森田 二十二年の二月十六日(日)晴れ、とこの記録に出ていますよ。この日に午後一時から青梅の断郊競走があったんだ。

岩下 その時の選手が平井賢治、桜沢正一、笹本巳代治という短距離メンバーだったが、総合の二位に入ってますよ。

森田 そして十月十九日(日)曇りで、この時第二回西郡連合青年団陸上競技大会が開かれた。まず団体順位は1、青梅、2、調布、3、霞、4、瑞穂、5、古里、6、氷川、7、福生、8、西多摩という順だった。福生と氷川は同点だったが氷川の方に一等の数が多くて氷川が上位になったんです。個人では、百米で、桜沢正一が三位、中村松子が二位。二百米で桜沢正一が二位、笹本久子が二位。四百米で、笹本巳代治が三位。八百米で桑林貞雄が四位。千五百米では中村益雄が四位。一万米で池上が三位。円盤で高橋武司が二位。高跳で平井賢治が五位、中村松子が三位。幅跳で平井賢治が二位、笹本久子が一位。三段跳で村野和男が三位。砲丸投で村野和男が二

位、と森田綾子が一位。リレーでは男子八百米で桜沢正一、荒幡忠男、笹本巳代治、設楽清一のチームが三位。女子四百で中村松子、笹本久子、井梅まつ子、浜中三枝子のチームが三位、というような成績だった。

(このように、森田正氏の戦後のメモ帳には珍らしい当時の記録が一杯である。引用している記録も、ほとんど氏のメモ帳からで、正確な記録である。――編者)

岩下 こういうことから青年が、支部対抗の競技などにも意欲をみせて、スポーツがさかんになっていたんですよ。

平井 二十五年に自転車ロードレース大会があったがこれは一回きりだった。

設楽 福生・五日市間で、支部対抗の駅伝もやったし、町内一周の駅伝も何回かやりましたね。柔道は榊健太先生にお世話になったものだ。

橋本 これは別に柔道の人で話をしてもらうのでここでは省略しよう。(福生の柔道会参照)

細淵 駅伝は三十七年の支部対抗があって、中学生チームもいくつか参加して、その中にプロボクシングの海老原博幸選手もいたそうだよ。

平井 この時は、中学生チームに一位をとられてしまったんだよ。まいったなあ。けれど、駅伝はまもなく交通事情などでできなくなってしまったんだ。

岩下 三十六年から三十七年は福生の陸上全盛時代で、郡の大会でも連続優勝しているね。

棒高の瓜生喜蔵をはじめ、木場本芳治、征二の兄弟、石川芳男。それから女子では森田佐知子なんかが中心だった。

野崎 卓球も強かったですよ。

福生と瑞穂が強くて、いつもいい勝負をやった。いつだったか、両チームが同率で決勝ということになった時、福生が瑞穂にさっと勝ちをゆずったことがありましたよ。とにかく福生が強くて、優勝をゆずることをやったほどです。

岩下 青年団の歴代団長を見ると、運動部関係の人がほとんどですよ。やはり、青年団の活動の中で、陸上競技というか、スポーツ関係の比重がとても大きかったわけですよ。団長も、自然にそういう中から選ばれたわけです。

文化活動

司会 話題を文化部へうつしましょうか。

橋本 文化部の大事事は、二十三年に結城孫三郎の人形芝居をやった。一小の講堂で、杜子春のあやつり人形なんか見せたんだ。今では、とてもこんなものを福生へはよべないだろうけどな。戦後の荒廃の中で、だれでも食うことに追われていた。結城一座も、地方の巡業で何とか生きのびるよりほかなかった。それと、杜子春の脚本家の渡辺渡氏が、福生で亡くなっているの、そ

の追悼の意味もあってきたのです。

篠崎 あの時は、細谷利男や石川昌一が提案者だった。青年団だけでは資金も足りないしという事で、第一小学校と話しあって共同主催で上演してもらった。昼間は小学生に見せて、夜は青年が見た。見物席は満員でしたよ。

石川(昌) やはり二十三年に、青年弁論大会をやった。その時の弁士の第一人者が細谷利男ですよ。この辺の小さいたんぼにしがみつく百姓で苦心している、その体験を発表したんだ。

森田 巡回映画会をやったね。スライドで婦人参政の問題をとりあげて棄権防止をよびかけた。

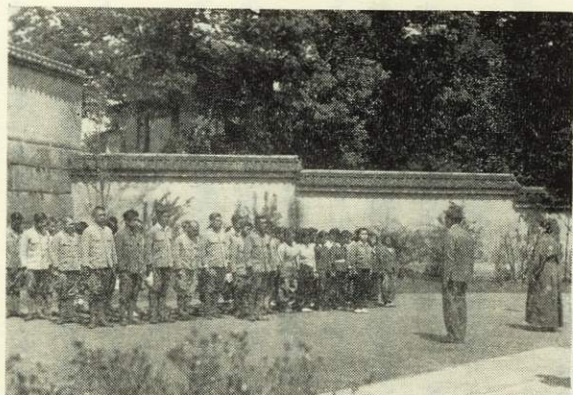
篠崎 機関紙については早くからやりましたよ。細谷の家の廊下で、みんなでガリ版をきったり印刷をした。"多摩の礎"というのだが、二十一年のはじめからでしょう。

石川 熊川の方では並木嶋雄先生を中心にした"ふるさと"というすりものを出していたね。

これは"多摩の礎"よりむずかしい内容のものが多かったと思う。この西多摩地方全体の青年運動や、地域復興を論じたものが多かった。当時、文化活動を中心とした青年団の指導者は、皆並木先生の影響を受けていたね。

(編者が、この両誌の数部を保存してこの場で回覧。当時の青年が、いかに生きることに真剣であったかをうかがえる。)

村野 福生・熊川両団の合併を機会に、"理想"が発刊されることになった。これは色ずりの



皇居の勤労奉仕

天皇・皇后陛下と福生町青年団、昭和23年撮影

表紙がついたしゃれたもので、内容もよかったな。これがごく最近まで出ていたんだろう。

森田 さきほど並木先生の話が出て思い出したんだが、二十二年の小学校の卒業式の時ですよ。

そこへ青年団がよばれて卒業生たちと話しあいをしたことがあった。学校の先生が、今のこの混乱した世の中へ子どもたちを出すのが心配だ。青年団の若者たちにふれあわせて、少しでも世の中を勉強させたい、という親心だったそうだと。とにかく、当時の青年団はそれほど社会から信頼されていたんですよ。

文化活動ではないだろうが、二十二年の五月十二日から十四日にかけて、宮城の清掃奉仕に参加して、すぐには参加できなかったんです。団員は一日五十名ずつ出かけて、皇居内の清掃奉仕をしたんです。私たちの真近に天皇陛下がこられて、畑のでき具合はどうですか、なんて聞かれた

時は感激しました。

橋本 戦後の青年団の文化活動は細谷利男を中心に推進されてきた。青年団読書会もその一つだった。これは道芝会という名で、いまでも続いているわけですね。

石川(昌) いまは読書でなくて、飲酒会のようになっていますがね。(道芝会参照)

橋本 そして、篠崎久治たちの青年演劇が台頭してきた。『ましら』『かっぱ』などという名舞台でかっさいをあげたんだなあ。(一六五―一八三頁参照)

祭礼と道路普請と

司会 戦後の混乱期には、青年団としてのむずかしい問題も多かったと思いますが。

橋本 二十一年のお祭りの時だった。米軍が装甲車を出動させて待機し、事故があればいつでも発砲するという事態になったことがあったな。

団長の私と井上副団長が警部補派出所と呼ばれて、MP(憲兵)と通訳をまじえて話をした。

その時、福生の不良と、当時、基地拡張工事をしていた人夫と大げんかをするという情報がどこから流れたんだな。米軍にいわせれば、これは基地工事に対する、占領政策の妨害であるというわけだ。

話をしているうちに、

「不良は何千人いるか」

「五、六人でしよう」

「それでは、復員軍人は何千人か。武器は何を持っているのか」ときかれた。

結局、不良を浮虜（ふりよ）（彼等は復員軍人のことをこういつていたのですよ）と通訳ちがいをしたらしい。時すでにおそしで、とにかく少しでも事故があれば発砲するぞ、とあらためて言われた。

たしかに復員組の若い者と工事場の人夫のいれずみをした連中などが、御興をかついで威勢がついたらと思うと、いやだったなあ。

竹島 神社のところへ青年を集めて、

「どんなことがあっても手を出してはいかん」とか、橋本団長が訓辞をしてたなあ。

まあ、幸いたったことはなかったわけだ。

司会 青年団と道路普請のような面はどうですか。

野崎 道路普請にかり出されるから、ということを入団をしぶった面も、一部にあったことは事実だな。しかし、一般には、それも青年団の大事事であるという理解をしてくれていたな。

司会 出なかった人から出不足をとったりしたことでは不平は出なかったですか。

村野 なにしろ当時は若い者の楽しみがまったく無い。極端に言えば、年ごろの男女が集まれるということだけでも、青年団の魅力だったわけです。だから会合にもよく集まったし、たとえ

道路工事でもその点の楽しみがあるといえた。

それに、青年団は修養団体である以上、社会への奉仕は当然、という考え方をしましたよ。だから、そこらの幹部の苦勞は少なかったですよ。その善意をあてにして、町などは奉仕をうけていたものが、青年を工事計画のあてにするようにもなっていました。こんどは、あそこをとか、こちらをとか計画につれて動員されるようなことにもなった。おかげで報酬はふえて、事業資金も楽になったな。

設楽 でも、だんだんそういうことに出る者が少なくなったりもしてきた。補助金をあてにしなければならなくなってから、団長になると役場への日参が一仕事になってきたな。

石川 当時、補助金というのでなしに、青年団の各種の事業に対する協力金のような名目で、町が金を出してくれたと思う。

村野 体育大会の時の、プログラムづくりで、寄付金もらいが大変だった。

設楽 青年団は寄付団体だ、なんて言われたりした。

細淵 俺のころに、街への米兵のオブリミットがあった。それで、商店街は目立ってさびれた様子だった。そんな時、この広告費にいったら、「寄付どころじゃないんだ」と、くっつかかれたような経験をしました。

司会 細淵さん（二十七年）のころで、団員は何名ぐらいでしたか。

細淵 三百五十名ぐらいだったでしょう。

司会 政治関係はどうでしたか。

細淵 羽村から代議士が出ている時は、一部では複雑な立場の人もあっただろうが、表面的に青年が何かやったことはないね。婦人参政のPR活動をしたり、町長選の立会演説会を主催したりしたこともあったが、これは団員の啓蒙活動だからね。

野崎 青年の中から候補者を立てて闘う、なんていうことはできなかったな。

司会 今という内ゲバみたいなことは、まったくなかったですか。

石川 そりゃあ、小さなことではありましたよ。

俺の時に、牛浜グラウンドができた。

その年は春秋と二回体育大会をやった。そして郡の大会も福生でやることになっていた。

そのために牛浜グラウンドの完成が待たれていた。そこへ、グラウンドの整地を手伝ってくれないかと話があった。評議委員会を決めて出ることにしたが、それなんかも一部で反対があった。そのあと巨人・国鉄戦がありましたよ。青年でその切符を売ってくれと頼まれた。それらの評議委員会は議論百出で、二晩もかかって結論を出しましたね。

評議委員でない左翼運動をしていたような連中が数人で俺をとりかこんで、「ボスのいいなりになる青年団反対」なんてやられましたよ。

村野 俺が団長の時に、団費五円の値上げ案を出したら、熊川の人で強硬な反対意見を出した人が一人いて、とうとうその一人のおかげで値上げができなかった、ということがあった。

石川(昌) でも団長はみんなきつい人たちだったよ。

この辺一带、かなり広い範囲に青年団関係の新聞が出ていた。それが、福生の青年団の悪口を書きたてた。竹島団長がこの新聞の人と大げんかをしたことがあった。目の前で新聞を破り、なんだこのやろう、というようにやりこめていた。

村野 石川も、グラウンドの問題の時など、壁新聞に団の悪口を書かれて、それをその人たちの前ではぎとってやりあったことがあったな。

まがりかど

司会 だんだんと青年団もむずかしくなってきたわけですね。

細淵 二十七年に九支部(本町)が解散したんですよ。他の部落とちがって、本町辺は若い人が、ほとんど外へ働きに出ているわけだ。職業も多様化していた。それで若い人同話しあう機会が少なくなってきた。

また、それまで戦時中の教育の影響がなんとなしに残ってきた団員が多かったのに、だんだん戦後の考え方が見えてきた。それから、いわゆる土地っ子も少なくなってきた。

そうしたことで、支部でやる会合に出席がへってくる。集まっても意見がなかなかまとまらなくなってくる。

そして、九支部解散をうちだしたわけだ。でも、それではせっかくの伝統に対して申し訳けないというような考えも多くあって、すぐに再発足をさせた。が、その時はもう団員が十数名になっ

てしまった。

岩下 それまで本団の幹部の構成を見ても、団長がかりに二十五歳の者なら、その一つ下の二十四歳の者が副団長をつとめるというようになっていた。ところが三十年ごろになると、団長とそれ以下の幹部の年齢に開きができてしまい、三つか四つ年下の副団長という事態が出てきた。団長が大変だからとこれを避ける気風もでてきた。そういう年齢層からの断絶も始まってきたんですよ。当時団員数は三百から四百名ぐらいでした。

設楽 それが原因とは言えないかもしれないが、そういう時に本団のクラブがなくなってしまう。あれが痛かった。そのかわりに、役場裏の改善センターを青年が使ってよろしい、ということだった。ああいう建物は青年にはなじめないんだなあ。

野崎 青年団は、自己修養と社会奉仕の場であるという考え方も、どうやら三十年までぐらいは保たれてきた。がそれ以後はもう考え方も変わってしまったようだ。

岩下 いやその後数年は続いていたようです。

青年団 “こぼればなし”

一 学校の先生と青年団

司会 かつての青年団には、わりと学校の先生が関係してくれたんじゃないですか。

森田 そうだ。地元の小学校や中学校の先生ととてもつながりがあり、指導もしてくれた。その代表が岩下先生だが、ほかに、田中貞雄、樋口三木雄、倉島裕、小野沢博一、下田寿二というような先生。そして熊川青年団と並木嶋雄先生など、忘れられない先生方だ。

二 団長さんのロマンス

岩下 青年団の固い面ばかりとりあげてきたので、一つおもしろい話を披露しよう。

青年団活動を通じて結ばれたカップルがいくつもあるんだ。その中で団長だけあげても、森田正をはじめとして、竹島益夫、村野晋三、田村修一、木村剛毅の各団長がそれだ。

橋本 青年団を去ってから、かつての人たちがその仲間たちで、いつまでもおつきあいをつづけているのは美しいことだよ。福王会を第一OB会とすれば、そのあとの第四OB会まであるんですよ。（福王会参照）それと道芝会もまだずうっと続いている。

三 “クラブのおばあ”

橋本 それと、青年団にとって忘れられない人があるんだ。“クラブのおばあ”といえば、当

時の青年ならだれでもお世話になり、知らない人はないだろう。

伊藤五郎さんの奥さんだ。伊藤さんはクラブの管理人だった。長い間、次々と変わった青年団の役員に、おばあ、おばあで親しまれてきた。私が団長だったころ、昭和十四年に青年倶楽部の小使いさんになった。

戦前は女子部は和服コートが団服だった。夜の会合には制服をつけてきたもので、その中でも、「川窪米ちゃんが女子部長の時などは、本当にきちんとしていて、今でもあの頃の人はよかったよ……」などと昔話になるとつかしそうに話す。とにかく、みんな用がなくてもクラブへ行つて、おばあそこたつて語らい続けたものだ。なんともいぬ人をひきつける魅力をもった人だったんだ。

篠崎 最近のことだけど、本町の細野久義がいい出して、当時の青年仲間十数人で「おばあを慰める会」をやったそう。お茶のみをして皆でさやかな記念品を贈つたらしい。おばあもえらく喜んでくれたそう。

その後の青年団

この座談会に出席した人たちの、その後の青年団長を引きついで皆さんは、
笹本巳代治、田村修一、石川慶一郎、森田和一、木村輝幸、森田皓大、木村剛毅、細谷幸次、大

野聡、森田貞之という人たちになる。

四十年に入ると、もう青年団は全町的なものでなくなってしまった。そして、四十三年の春に、福生町青年団はまったく姿を消したのである。

衰微しだした青年団、そして解散。その間の青年団の動きを大略記してみたい。

その前に、青年団活動としては、特異な活動をした、第一支部青年団の三十一年ごろの話題がある。

石川忠芳支部長と副支部長の石川和夫らが話しあい、何か子ども会のお手伝いをやることにした。はじめ子どもたちによびかけて、幻灯を見せたりしていた。幻灯だけでは能がないので、皆で研究した。本団副団長の石川慶一郎や千手院の服部照親らが応援にのり出してくれた。千手院の本堂を借りて人形劇を見せることにした。服部がその方面の指導を担当して、団員に人形をつくらせ、石川和夫が脚本をつくった。司会を松岡春枝がやり、本団の野島和枝も協力した。

まもなく町会の南会館もでき、子ども会の名まえも「仲良し子ども会」とし支部員皆でこの活動に協力した。第二小学校長から感謝の言葉やら、PTAからは人形劇の舞台を贈られた。敬老会の席へよばれたり、町の子どもの会に招かれて上演したりで、この人形劇が好評だった。団員はそれぞれの近くの子の読書指導や球技大会のコーチ役なども引き受けたりした。

三十四年に、都教育委員会は、この青年たちを表彰した。

表彰状

福生町・福生町青年団第一支部

あなたがたは、つねに極めて適切な団体活動をされ、本部青少年団体活動に大きな力を与えております。ここにその努力をたたえて、昭和三十四年度東京都優良青少年団体として表彰します。

昭和三十四年十一月二十九日

東京都教育委員会

石川慶一郎団長の時には、町内美化運動の先頭に青年がとび出した。

しかし、こうした活動も、この子ども会指導の記録をのこして、まもなくこの町から見られなくなっていく。

青年たちは、自分自身のことには忙しくなる。

三十九年に、団員は総勢百五十名ぐらいとなってしまった。支部組織も一支部から九支部まであるうち、半分ぐらいは名のみ存在となってしまった。リーダーに人を得ない支部から、しだいに解散の運命をたどった。

四十一年には熊川地区の支部は無くなってしまった。

五支部（志茂・牛浜）六支部（長沢）七支部（永田）八支部（加美）が残っていたが団員数は二十名が最高の支部。小さいところは十名に満たなくなった。

本団の行事としては体育大会など不可能となり、卓球大会、松風園（老人ホーム）の慰問、祭礼、クリスマスパーティーぐらいとなった。町教委と共催の青梅の青年の家での研修会には幹部が参加していた。

その研修会の席で大野団長は提案した。

本団と支部という関係も維持できない状況なので、支部をそれぞれに独立させたサークル形式の活動にきりかえてゆくことを。

賛否半ばして、これの結論は出なかった。

その年、体育大会をきりかえて、町の中の若者の新興グループによりかけてソフトボール大会を開いた。

教育委員会の指導で、青年学級と成人式の年代別にサークルを組織しているグループが、このころから新しい動きを示していた。それらのグループのほか、金融機関や、町役場、青果会社などの十チーム余りが参加して、この大会はうまくまとまった。

青年団がすべてであった若者の集いが、こうした新しい形で見られるようになったのはじめてであった。（青年団体連絡協議会参照）

団の資金源であった赤十字募金の活動も、もうむずかしくてまとまらなかった。会合には出てくる。出てきても話し合いに対しての発言はしない。ゲームなどになると積極的なところを見せてくれる。ボーリング大会、ダンス教室なども試みてはみた。

青年団へ求めてくるものは娯楽だけなのだと、こんなところから察しはつくが、本団の幹部連としても、これら若衆への対策をどうやったらいいかわからない。

支部によっては、女性団員がゼロのところもあった。その支部の団員は、他の支部が女性をまじえて集会しているのを羨むような空気があった。

福生町青年団の解散

青年団は、地域とのつながりも団の目的もほとんど失った団体になってしまった。行事も新しいものは考えられない。それを改善していこうという熱意を示す者など現われない。

団員の生活意識の中から、地域社会とのつながりはすべて忘れ去られているとしか見えないようになった。

四十三年の春を迎えるころ、森田貞之団長は後任団長さがしにかけずりまわった。現況を知る者は、その役を逃げる。

森田団長は腹を決めた。自分が信頼できる後輩が引き受けてくれないなら青年団を解散する。

解散会を桜の咲くころやろうよ、との話もあったが、その後何の集まりもないまま、福生町青年団はちりぢりになってしまった。

青年団と“人”

石川弥八郎氏

はじめの方で特筆されている石川弥八郎氏は戦後すぐにNHKのラジオ放送で青年団の問題について講演した。また、米軍は日本進駐のはじめには、日本青年団の軍国主義性を指摘してきたが、その誤解を正させるよう大いに努力されたのである。

その活動の一環として、熊川青年団の実態をNHKから放送させる労をとった。

その石川弥八郎氏に、次のようなお話を伺った。

山崎 青年団活動をふりかえって、今でもそれに参加されて良かったと思っておられますか。

石川 我々の時代は、青年団は“修養と社会生活を通しての地域社会への奉仕”という自覚を常にもち、この地の住民としての誇りと責任を植えつけられました。

その中で、私も青年団活動を続けてきたわけです。

今もし私の生活にバックボーンがあるとすれば、それはみんな青年団活動のおかげです。青年団当時から今でもおつきあいを続けている友人も多いが、その人たちとの交友だけとりあげてみ

ても、本当に青年団活動に感謝しています。

山崎 熊川青年団が、戦後すぐにNHKから放送に登場した時の裏話を、聞かせてください。

石川 米軍は当時、日本の青年団をヒトラーユーゲントのように考えていた。そのころ、私の青年団の師である熊谷辰治郎先生と、私はその誤解をとくために米軍の民間情報部の人たちにあったりして、地域青年の実態を見てもらうように運動した。

当時の熊川の青年は、この本文にも紹介されているような立派な活動をしていた。そのありのままを米軍情報部の人たちに、実際に見学してもらった。それをNHKが放送にしたわけです。

（編者註） この時の様子が、戦後、青年団の機関紙「ふるさと」に紹介されている。

ビックリング大尉という情報部の将校が二、三の軍人ときた。まったくの丸腰で、特に従者もなくきたことに、熊川の青年は旧日本軍との違いを見て驚いていたようだ。またビックリング大尉があとで、その着実な青年団活動に、大いに称賛のあいさつをして帰られた、という記録であった。

山崎 こんど、青年団は復活すると思いますか。

石川 昔のような姿の青年団はもうできないでしょう。でも、かつての青年団の目的であった、「修養と社会への奉仕」という考え方が、現にボーイスカウトやロータリークラブのところで強調され、それらの団体が、立派に運営され実績を上げていることを考えたとき、新しい世界観に立った、青年だけの組織ができてこないはずはないと思います。

若い人の中に、そのような奉仕精神に共鳴している人も多いと思います。これからも良識をふまえて郷土をみつめる若い者の集まりがあっていいわけです。

時代が変わっても、かつての青年団の本質が——かつての青年団とは、戦争以前の青年団を言う——その存在を否定されるべきでないと思っています。

（両氏の略歴）

熊谷辰治郎先生

元大日本連合青年団総務部長

大正時代から全国青年団の指導に当られ、青年運動に関する著書も多い。

西多摩郡にはしばしば来られたので既知の方々も多い。

現在も青年運動に挺身されている。

石川弥八郎氏

昭和三年 熊川青年団長

昭和七年 西多摩郡青年団副団長

昭和十五年 同団長

昭和十六年 青年団改組により西多摩郡青少年団副団長

昭和二十一年 財団法人・日本青年館理事

青年団体連絡協議会

松 坂 直 人

今からちょうど五年前の四十一年に、福生に初めて青年サークルが誕生した。青年一人一人の存在をもっと大事にしたい。狭い生活領域から脱皮して社会人としての自己を形成しよう。自分の生き方を形成しなければ、私達の活動は地域を大切にしながらやってゆかねばならないのではないか。それこそ様々な問題を互いに投げかけあい考えあひながら、現在に至っている。そして今、二百名（現実に活動している実数に近い）ほどの青年が加わり、精力的に活動している。土筆の会・はぐるま・赤トンボ・サークル芥子種・なめこの会・FRC・河童の会（スポーツ）・吹奏楽愛好会・フォークソング愛好会・フォークダンス愛好会と十サークルにふくれ上がっている。この五年間に多くの青年が自分の全力を注いで、まさしく自主的に創りあげて来たものである。こうした過程で、悩んだり、苦しんだり、模索の連続だったが、そこで知ったことの一つ一つが感動となって、大きな喜びとなってかえって来たことも確かである。こうした巨視的な見方の裏に



青年の集い

は、個々人の努力や生活上の難題が、洪水のように噴出して来て、それを学習のテーマとした。活動に疲れた者がその無意味を訴えたり、直接生活に還元出来ないとして去っていった者も多い。

だが更にサークルの数が拡大してゆくことは明確に予測されるものであり、コーラスグループをつくりたい、演劇サークルをつくりたいなどの声も聞かれる。そして参加したみんなが何か得られたと実感出来るようにしたいし、そんな意味でもこれまで五年間の私達の積み上げを整理し、しかも未解決の問題をどう解決するかを考えるため、更に地域の多くの方々にもよく知っていただくために、まだ短いサークルの歴史ではあるが、紹介をさせていただく。

サークル五年間の歴史（年表）

四十一・五

福生町に青年の自主サークル誕生

土筆の会発足

(青年の心の交流と主体性の確立を目指して誕生する)

——青年団の永続的な活動——

四十二・二

さんしょうの会誕生

(在住の青年を中心に、成人のつといを母体に誕生し、青年同志の深いつながりを目指す)

同・五

土筆・さんしょうの結びつき成立

(交流会が持たれ共通の意識でガッチリ連繋。合同活動・情報交換が密になる)

同・六

“青年の集い”開催の提案(土筆・さんしょうで決定)

(地域の青年の幅広い交流を計ろうとする)

同・八

フォークダンスクラブ再発足当日、青年団と対立(場所の問題で・改善センター)

↓自主サークル対青年団↓(活動場所・優先使用の横暴)

同・九

黒百合山岳会誕生

同・九〇十

“青年の集い”主旨で対立

土筆・さんしょう対青年団・黒百合

地域青年のコミュニケーション

青年の社会参加

活動に対する考え方の相違から偏見となったり、初めての催しにしてはスケールが大きすぎるとして開催に反対する。

同・十(末)

“青年の集い”形式的な協力態勢が成立

土筆・さんしょう・フォークダンスクラブ(集い以後消滅)・青年団(実質的な動きまったくなし)——黒百合、協力拒否。

同・十一(初)

第一回“青年の集い”開催(青年五百名が参加)

成功裡に終り、自主サークルの活動の根強さ、発言権高まる。

四十三・二

フォークダンス愛好会誕生

同・一・三

連絡協議会結成の気運高まる

同・四

黒百合山岳会、サークル内部事情で衰退（冬山・夏山ハイキング・ロッククライムと、要求四分する）

同・四（末）

つく・さん・FD（フォークダンス愛好会の略称）対青年団

（連絡協議会結成において、青年団の発言権を強めようとする動きに、自主サークルは対立感情を持っていた）

その後、青年団の態度が終始不明確で、結成の遅延をきたす一方、団活動は衰退の一途を辿る。

同・五

青年団体連絡協議会発足

（所属） 青年団・土筆・さんしょう・FD愛好会

同・六

青年団、本団と二支部しか活動がなく弱まり、青連協所属も保留

同・七

第二回 “青年の集い” 実行委員会発足

同・八

「町政を聞く会」（青連協へ「土筆の会」から提案）

* 公民館設置要求、他民意をどう反映するか、基地についてどう考えているかを聞く

同・九

西多摩 “青年の集い” に参加（つく・さん・FD参加） 青梅 “青年の家”

西多摩八カ町村の青年団体、サークル交流研修会——主催・都教育庁西多摩出張所

同・十

第二回 “青年の集い” 開催（つく・さん・FD）実行委

福生の青年、四百名参加

同・十一

“集い” 慰労バスハイクを行なう

“集い” をきっかけにフォークソング（F・S）愛好会発足

“青年の集い” “青連協” のあり方の意見、批判も出て来る

四十四・二

サークル芥子種誕生（この年の成人のつとよい母体）

五日市青年の家において「宿泊研修会」

同・二（末）

↓サークル運営について、主催、教育委員会

同・五

青年団体連絡協議会総会（各会全員参加で）

これまでの批判、誤解、矛盾点を、青連協の姿、方向性を出す。政治的に傾きがちではない
か↓青年の要求に従った文化的な活動することに落ち着く。委員の改選、その他

同・六

連協方針に従った活動計画をつくり、みんなの要求を大事にする

第三回 “青年の集い” 実行委員会発足

（F・S愛好会自主発表会を開催する。農協ホールにて）

同・七

“青年の集い”の意義について話し合う

土筆、さんしょう、F・D、F・S、芥子種の活動順調

同・九・十

はぐるまの会発足（教委青年教室から自主サークルへ）

“青年の集い” 準備活動

すっきりしない意見のくいちがい。「創造性を高めよう」

商業娯楽批判

余暇善用、意識高揚

人間性を解放する

現実の生活は労働そのもので、余暇などなく、創造性を
回復しなくちゃあ

学習会、全4回行なう。

同・十一（初旬）

第三回 “青年の集い” 開催

「創造性を高めよう」 四百名参加

同・十一（末）

西多摩 “青年の集い” 五日市青年の家にて

「恋愛、結婚について」 各サークル参加

同・十二

“さんしょうの会” 活動の衰退

吹奏楽愛好会発足

年末、各サークルとも、クリスマスパーティー等行ない、本年の活動のしめ
四十五・一

“成人のつどい”へ、青連協各サークルの一部が協力

“さんしょうの会”解散（方針のまずさ、会員の減少、無気力化）

同・二

宿泊研修会、事前研修会

（各サークルの活動状況を発表することにより、問題解決のための討議をする）

青連協は、カタイ話ばかりで、面白味も意義もあまり感じられない

具体的活動体系をもつようにしようという動きになる

（サークル対抗スポーツ大会、七夕の福生音頭参加、レク指導をするなどの案が出た）

同・三

宿泊研修会を行なう。（主催・教育委員会）

「私達の生活とサークルの意義など」

同・四

サークル対抗スポーツ大会（八チーム出場）

（第一小体育館、バレーボール）

「河童の会」自主サークルの仲間入り（市営プールのバイト同志で作ったスポーツサークル）

*「芥子種」活動衰退気味

同・五

青連協総会（委員の改選、その他）

青連協の役割、位置づけ、組織など再検討

「赤トンボの会」自主サークルの仲間入り（この年の成人式が母体）

青連協の年間活動計画の立案

サークルの多様化に対して、どう受けとめ連繋をとるかが課題

同・六

F・S愛好会、第二回発表会開催（西武信用ホール）

生活改善センターに教育委員会が入るため、活動場所の変更を余儀なくされたが、福祉会館開

館まで活動場所の保障を教委に要求

（問題の行き違いが多く各サークルから不満続出→市民会館、役場地下室などに分散）〔福生市制施

行〕

同・七（末）

福祉会館の開館

会館使用上の規制が多く、使用上の要求、改善策を話しあう

同・八(末)

各サークルとも再度にわたる活動場所の変更により幾分停滞気味

第四回 “青年の集い” 実行委設置(例年より相当遅れる)

同・九

全サークルが“青年の集い”準備活動一本に集中する。(一時、開催をあやぶまれた状態) “集い”実行委員長が女性になった。(初の)そのせいか調和がとれ、総力結集に向かう

主旨、“青年の交流を深めよう” “恋愛、結婚から生き方を考えよう”(全四回学習会)

同・十(末)

第四回 “青年の集い” 開催

前夜祭、話し合い、ゲーム運動会、音楽会と三日間にわたるスケールの大規模化が実現。更に

音楽会は、地域のサークル自身によって行なわれたことなど成果が大きい

同・十一

“集い”慰労会

同・十二

青連協主催、社交ダンス講習会、全五回

(今後、レク指導、学習指導、専門サークル研修など、青連協が各サークルの活動に直接役立つ研修会を行なっていくという見通しができた)

四十六・一

“成人のつどい” いくつかのサークルが部分協力

同・二

宿泊研修会、五日市青年の家にて

④専門サークルの問題、⑤学習総合サークルの問題

F・R・C会自主サークルの仲間入り(地域の職場サークルとして発足)

なめこの会発足(この年の成人の集い実行委が母体)

同・三

青連協の役員がもっと責任をもって活動をしなければならないのではないか(組織態勢を再度立て直す)

同・三(末)

吹奏楽愛好会・第一回定期演奏会の開催

サークル紹介

土筆の会

今から五年前に発足し、会存亡をあやぶまれるさまさまの過程をふまえて現在に至った。身近な生活現実の学習を柱に、いろいろとり入れて活動している。地元っ子と転入者が、学生と勤労者が、相互に理解しあいその立場をうまく使って互いに高めあうようにしている。

現在、永く活動して来ている者の生活のサイクルの変化などにより、中心が若い層に移行しており、ごたつきもあるが、更に充実した活動に入っていくと思われる。

FD愛好会

四十三年に発足し、その後「土筆・さんしょう」と共に福生のサークル活動を発展させる基礎固めをして来た。当初フォーク・ダンスを仲間づくりの手段とするか、それとも専門的に深く追求すべきかの方針に悩んだが、現在は方針も決まり安定した活動をしている。地域の子供会にも出向いてフォーク・ダンス指導をした経験ももっている。

現在会員は二十数名で女性も多く、そして愛好会関係で結ばれたカップルが三つもある。その他、別地域のフォーク・ダンスとも交流会などを行ない、かなり活発である。

FS（フォークソング）愛好会

このサークルは高校生が主体となり、数名の勤労青年が加わって活動している。四十二年の第二回青年の集いをキッカケに誕生し現在に至っている。その間自主的に発表会を二回開催しており、二度目には多摩高、農林、武蔵野女子など高校生のフォーク愛好会（バンド）を集めてその交流のカナメの役割も果たした。目的はフォークを通して唄うことの楽しさを知り、若い仲間の結びつきを強め、お互いを高め合っていくことである。

中心が高校生のため、いろいろと問題がある。運営をあなたまかせにしたり、遊びとサークル活動をゴッチャにしたりで、それらに外部からの批判も多い。しかし、お互いの意見に基づいて企画を立て、相互に共通のルールを作り守っていかねばと意欲的な者も多い。

サークルには、自主的に主体的に自分がかかわりあっていかないと、停滞したり消滅してしまうので、皆の努力がいつも必要だ。まわりのサークルに甘えてばかりいれば、活動の意味がないからと忠告もしている。これからの問題は続くだろうが、メンバーの一人一人がそうしたことで成長出来ればさいわいである。

音楽の基礎講習もしてゆきたいと考えている。今、個人バンドと、団体練習をどうカミ合わせるかが問題である。

はぐるま

この会は、教委の「青年教室」を一年間経て自主サークル化したもので、その時は詩を中心に

行なってきた。そして自主化以後は、社会科学の読書会を行なったが、本の選定が多少まずくて言葉も難しかったせいか、中断を余儀なくされた。その後、自分の生い立ちを互いに書きあうという事で始め、これが成功してお互いを深く知りあえたとし、課題もわかったことだからこれからの学習に期待したい。

また、様々にレクリエーション、ハイキングなどとり入れて充実させようとがんばっている。この会は女子会員が多いことも特色である。

サークル芥子種

四十四年の成人の集い実行委が母体となって自主サークル化し、精力的に活動している。しかしメンバー連繋が同窓会的なものを基調にしていたため、更に話しあいや学習もやろうとテーマ（郷土史）を設定したが、政治、経済、文化などの基礎知識が不足のため混乱気味。

それぞれに個人的には、その力を持っているが、それを全体として活かしていないようだ。

赤トンボの会

四十五年の青年の集い実行委が母体である。はじめ、月一度ぐらいのダベリングをしていたが、五月にサークル化して活動をはじめた。

マンガについて、三島由紀夫の死についてなど、時事、社会風俗的なことを含めた話しあいをし、またそれぞれのテーマで資料も含めた個人の意見を述べあうという文集活動に力を入れている。

る。地元つ子中心の青年たちが他サークルに負けずにがんばっている。

FRC会

メンバーは二十名。福生郵便局の職員で形成されている。サークルに仲間入りしたのは、その活動場所がないことや、他サークルとの交流で活動内容を充実させたいということである。

なめこの会

四十六年の成人の集いの実行委のメンバーから生まれた。現在メンバーの増加と方針などを考え、活動も開始したばかりである。青年として、社会人として考えるべき点を素通りした仲間作りであってはならない。これから自己の課題や生活を考え、話しあえる方向に望むわけで、自分たちのすべてをぶっつけてサークルの発展を目指している。

河童の会

唯一のスポーツサークルである。市営プールでアルバイトした同志がつくった学生中心のサークルだ。夏は水泳が中心で、シーズンが過ぎると、バレーボール、バトミントンなどの日常的スポーツに親しんでいる。学校の体育館を利用してもらっているが、市民が日常的にスポーツが出来る施設、市民体育館のようなものを欲しいし、スポーツ指導者もと願っている。

これから、スポーツのチャンスの少ない、勤労青年も多いに参加してもらいたい。それにこたえられる、サークルにしたい。

吹奏楽愛好会

発足してから一年間。四十六年に、第一回定期演奏会を開催するに至った。もちろん一朝一夕にここまで来たのではなく、二、三名で淋しく練習したことも数度。生みの苦しみは十分に味わっている。同時に周囲からの協力やあと押しも大きな力になっている。現在、大型の低音部を中心に、全体的に楽器が不足していることが当面大きな問題だ。メンバーももうすこしふやしたい。

これから、市民による自主的な吹奏楽団に発展できるよう、また全市民的に親しまれるようなものにしたいと願っている。

むすび

以上各サークルの紹介を、極めて簡単に説明した。本来ならば、一人一人の努力やがんばり、そして悩み、生活上の問題など、浮彫りにしながら、こうした活動の本当の意味を述べてみたいが、紙面の都合でそれはできない。

概略だが、福生に、青年のこうした新しい活動が芽生えていることを御理解いただければと思う。更に、サークルがこれだけ多く、しかも連絡協議会など持っているのは、東京でも、小平市と福生市ぐらいしか見当たらない。

この青連協は以前の青年団のように、青年がそれに参加することがあたりまえである、と考え

るほど、まだこの土地に定着していない。

私たちが、自分の人生を大切にし、その生き方を形成し、社会人としての自己を確立する場として、また生活を豊かにする意味で、個人的な趣味段階で留まることなく、スポーツ、文芸的なものも含めて、私たちの人間性向上のために活動していきたいと願っている。

そのために、地域の方々の一層のご声援と、青年期のこうした活動参加の意義をぜひ理解して欲しい。これからも、純粋に、情熱をかけ、そして青年として考えることの出来る場を、広げ、発展させていきたいと考えている。

(青年団体連絡協議会会長)

福王会のこと

石川 保

昭和二十六年、当時の青年団OBが忘年会をした時に、以後もずっとOB会を続けていくために、OB会と名づけた組織をつくった。その後、どうせなら、もっと多くの会員を持つ組織の方が良いというので、大きく伸びるようにと、福王会という名がつけられた。

元来が、青年団時代、共に楽しみ、遊んだ仲間の集まりだから、遠慮もなく、固苦しいことは

いっさい抜きにして、共に飲み遊ぶのが、主目的であった。だからはじめは、会則も何もなく、会長、副会長、会計の三役が幹事で、二年間ずつ無駄骨をおる。役員は全員交替制、持ちまわりで、必ず役員を一回はやる。会費は月額二百円ということで、発足以来二十年も続いている。三十四年に会則をつくり、「会員相互の向上・親睦と、福生町青年団の後援」を目的とした。

福王会で、皆さんに自慢出来るものが一つある。それは毎年春、家族旅行を行なっていることだ。もちろん、夫婦子供全員参加が義務である。春の一日を、家族全員が共に楽しむ愉快な旅行で、二十年間、毎年実行している。特にこの旅行は、奥さんや子供達に好評で、旅行先は子供中心に選び、遊園地が多い。そこでは、大人も童心にかえって、楽しい一日を過ごす。

今までに、江の島、鎌倉、船橋ヘルスセンター、分福センター、富士急ハイランド、神代植物園、読売ランド、多摩動物園、梨がり、潮干狩等、ほとんどの行楽地に遠征している。

会費の二百円は収納率百%で、会員の留守中、会費の徴収に行くと、奥さんたちは喜んで会費を全納してくれる。これは、毎年の旅行を期待しての好意であろう。

春の旅行では、殿方が家族の労をねぎらうため、献身的なサービスをするので、秋は殿方だけで一泊旅行を行なう。これも殿方全員の大きな楽しみの一つである。福王会は、遊びに徹した会だから、今後も永く続くことだろう。それらを通じて、心と心のふれあいがあるからこそ、福王会が永続してきた秘訣であろうと思う。

次に、会員氏名を記してみたい。

秋山彬、青山実、青山次男、岩下伴蔵、石川保、加藤哲郎、桜沢正一、齋藤異、坂本郷一、笹本已代治、設楽清一、田中潔、田村修一、田村昭次、中村益雄、野崎博、平井賢治、古谷潔、細瀬万吉、村野晋三、村野忠、横田邦夫。

(NHK職員)

社会教育のあれこれ

野 沢 久 人

はじめに

山崎さんから「ふっさつ子」第二集で、福生の戦後の文化活動をたどっておきたい、という話をお聞きした時、「申しわけないな」と思う一方、「ありがたいな、すばらしいな」と感銘を受けた。

申しわけないのは、社会教育の担当者として市にお世話になっていながら、そのへんのまとめをまったくやれなかった自分に対してであり、すばらしいなと思うのは、本来、社会教育は住民のものであるが、それを実行に移す人がこの福生にということに対してである。

他の市町村も、かなり知っているつもりであるが、このたびのような規模のものをこのような形で編集された話は聞かない。

それで、山崎さんから企画全体の流れの中で話題にふれられていない部分を埋めるように言われた時、困ったと思いつつも、もちあわせている材料の範囲の中で、お役に立ちたいと思った。

もちろん、勉強させてもらってきたとは言っても、あっちこちに顔を突っこんでいるだけで深いものはないし、また、たかがここ九年間だけの私の経験でしかない。

そんなわけで、十分のものは書きあらわせないことをご了承願ひ、いちおうのまとめをしてみた。あくまでも、他の方々のと違う内容のものだけで、まとまりがない形になってしまいうけれども、それもお許しいただかねばならない。

ボーイスカウトと少年たち

子どもがどう育っているかは、その社会を構成しているおとなの問題である、というのは情報化時代の今日においても、逆にますます重要なことだと言わなければならない。

なぜなら、テレビをはじめとする多様なマスコミの中から、子どもに何を選択して与えるかは、親（大人）の力にかかっているからである。この意味では少年教育はまさにおとなの問題であり、ことに福生という地域の文化（社会的ルール・規範）の問題である、と言える。

子ども会がなかなか育ってこない（現在は第三小学校の地区を中心に、新しい動きが出てきているが）。福生の中で、ボーイスカウトが十周年を迎えることは、この点で大きな意義をもっている。

しかもその中心となってこれを支えてきた人たちが、隊長の天田文雄さん、団委員長の内田芳郎さん、育成会長の田村祐一さんと、十年来変わらずに熱意を注いでこられたことは、大変なことだと思う。特殊な例を除いて組織のリーダーが十年も変わらなかったことは珍しいし、ときにそのように長いことで弊害を生み出す傾向が見られることもあるものだが、わがボーイスカウトにはそれがまったくない。

しかも、カブスカウト（年少隊）の子どもたちが、今は立派なリーダーとなって、幼い後輩の面倒を見るまでになっている。

このことが、現在の教育の中では非常に大きいのではないだろうか。現今、おとなにも子どもにも「たて」の関係はほとんど失われてきている。もちろん、単に権威か地位（たとえば親だからという地位）によっているならば、子どもたちに尊敬されることはないだろう。

しかし、人間としての力を培ってきた年長者から年下の者が学ぶことは多い。

断絶の時代の一因は「たて」の人間関係の失われていることにあるだろうし、それをつくる場を不幸にして皆が持っていないことにもあろう。

ボーイスカウトの今までの歴史の中には、その点で優秀なリーダーが多かった。日曜ごとに無



成人式風景

このようなことを目標にしての「成人の日」であると思えば、成人の日は一つの活動の出發であって、そこから、学習や仲間づくりがなされなければならない、ということから、ひとりぼっちの青年たちが集まり、グループを作るようになってきた。

それ以降のことは、青年団体連絡協議会の松坂さんの項に詳しい記録がある。もちろんこれらへの移行は、そう簡単なりといったわけではない。最初の年はグループづくりは失敗したし、それ以降も必ずしも成功しているとはいえない。しかし、青年のグループがつくられる機会がまったくなかった最近の青年の孤立化、分散化の中で向上への意欲をもつ青年が活動をはじめたことは大きかったと思う。

償で子どもたちの教育に当ってきたこれら多くのリーダーの方々の努力は、必ずや今後、見事な結果を見せてくれることだろう。

ボーイスカウトの歴史については、その記念誌が近く出されるということなので、それは別におくとして、子どもたちを含めて関係諸氏の少年教育に対する、更に一層のご努力によって、その大発展が必要とされている時だと感じている。

成人のつどいと青年たち

成人式については、過去からいろいろな論議があったし、それは今も続いている。

福生の成人式は昭和三十九年までは、式典が行なわれ、町の側でお祝いするという型のものであった。その型では、第一に成人者の参加が少なくなってきたこと（アンケート調査などでも、必要性を認めていない傾向が見える）、第二に、成人することの意味を認識したり確認したりすることが、式典の中のみで可能であるかどうか、の疑問があった。

そこで四十年については、各町会から新成人者二、三名ずつに集まってもらって、成人式について検討してもらうことにした。成人の日についての考え方が確立してきたのは、次の年からであったが、そこではほぼ次のようなことが確認された。

第一に、成人の日に集うこと（式典）は、市民が成人者を祝い励ますことである。

第二に、成人した自分たちにとっては、二十歳になったことの意義を再認識し、再確認する機会にすることである。

第三に、福生のように流入者の多いところでは「我々」としての仲間づくりを、この機会にする必要があることなどである。

成人のつどいの運営にしても、青年たちに任せることについては、いろいろと問題があった。担当者として言えば、自分の方で準備してしまうのが最も気楽で簡単である。しかし、青年がその持っている力を地域社会の中で発揮する機会が少ないし、そのことが地域（福生）を考える―郷土愛―を培う一つの機会になるであろう、と考えた。更に、理想を追う青年たちが、現実の社会とのぶつかり合いの中から学ぶものも多いだろう、とも思った。

いずれにしても、毎年成人する六百名から七百名の人たちが、これを機会に福生をみつめ、二十歳になった、大人になる（法的にも精神的にも）ことを知り、これからの人生を想い、意識的に考えあうこと（学習）への契機となっているとすれば、後はただ、成人された方々の、それぞれの場での活躍を期待するだけである。

毎年、これを一つの機会にして多くの青年たちと接してきた。そして、すばらしい青年たちが福生にたくさんいて、彼らの中に必ずしも現実の中に埋没し、自己を喪失し、いいかげんな人生を送っている者などいないことを確かめてきた。

同時に、同じ世代の青年が、これほど違うのかと思う程に、その持つ価値観や態度が違ふことに驚かされる。そして想うことは、これらの青年たちが横に連なつて、それぞれの良い面をお互いにとりあう機会をできるだけ多くしたい、ということである。

違いはあつても、それは共通の基盤の中から出てきているもので、それをどう捉え、どのよう

に解決しようとしているかの姿勢の違いだけなのだから。

人対人の（面と向かいあった）コミュニケーション（お互いの伝えあい）の中でしか、やはり自分を鍛えていくことはできないと思うし、自らそういう機会を創ろうとしている青年たちは多いはずである。

婦人の学習

福生の婦人会の学習活動の流れには、大きく分けて三つの時期があるように思われる。第一期は、私には最も不明な点が多いのだけれど、昭和三十三年までである。いわゆる、地縁的な婦人会が、戦後の状況の中から大きく成長した時代であつたと言つてよいだろう。

第二期は、その後四〇年ぐらゐまでの婦人会の、支部婦人学級の花盛りの時期である。数の上から言えば、毎年五百名近くの人が婦人学級で勉強した時代である。

第三期は、婦人会の活動とともに、婦人学級で学んだ婦人たちが、自主グループをつくり、その中で学習を続けて来ている時期であり、それは現在まで続いている。

大まかに、この三期に分けたが、ここでは第二期について述べてみたい。

第二期（昭和四十年まで）

福生町に婦人学級が生まれたのは、昭和三十三年からである。当時の橋本兵五郎教育長が、学校教育の中で感じておられた社会教育、家庭教育、殊に婦人の学習の必要性から出発していった、と言ってよいだろう。

そして婦人会の方々と語りつて、ともに婦人学級を進めてきたわけである。

記憶には定かではないが、学習とか勉強とかいうことが、この地域の婦人会にとって、はじめはどんなに抵抗があったかを、いつか聞いたことがある。学習とか勉強といえ、子どものやることだと信じる人々に、我々の日常生活が、即学習につながっていることを解ってもらうのに、多くの時間が費やされた。

三十七年当時で二十二グループ、三百六十五名の方々が、五年目の学級に参加していた。このころは、森田潤三氏（文化財調査会長）が婦人学級の指導に日夜努力しておられたところである。

人数が多いように、婦人学級での学習内容がまたバラエティに富んでいた。

全体学習といって、全学級生が集まる会合では、井坂行男東京教育大学教授の「青少年と家庭教育」という話があったり、「話しあいの進め方」についての学習、並木俊守先生の「最近の経済」という話。更には、小、中、高、大学の先生に出席してもらって「現代っ子」の分析をするパネルディスカッション（陪席討議）が行なわれたりした。

各支部の学級の中では、青少年の教育や経済問題、選挙の問題などが取り上げられ、更にその

間にレクリエーション、料理、お花など、まことに多彩な内容を持っていた。

このころ、全体の学級世話人は、志村立さんがやっておられた。

もちろん、この婦人学級についてもいろいろの問題があった。

一つは、婦人間における人間関係のむずかしさであり、ややもすると何のために集まったのかよりも、感情論の方が優先してしまうという面もみられた。

二つには、問題について深くというよりは浅く広くという、課題解決が常に途中で終わってしまふという傾向もみられた。

とはいっても、この婦人学級の果たした役割は高く評価されなければならないと思う。今、各種の婦人活動の中心になっているメンバーは、皆このころの学級に参加しておられた人たちであるといつてよい。

前述の問題点の二つ目で書いた、浅く広くということから、内容を深めたい（同じことの繰り返しを五年間やってあきがみえてきた）という、別の型の婦人の学習が生まれてくる。

それはテーマを四つ決めて（家庭の法律、青少年の教育、社会的良心、主婦と政治）全町から希望者が集まり、助言者を決めテキストを使って学習する学級である。

ちょうど、文部省が委嘱婦人学級の補助金を出していたところで、婦人会と教育委員会がそれに乗っかって学習しようとしたものである（三十八年）。

ここでの学習は、前述の四つのテーマを中心に、それを各種の方法で学習している。たとえば“家庭の法律”は、岩波新書をテキストに講師を招き、“青少年の教育”では誠明学園の見学とか、子どもについての調査なども実施する。“社会的良心”のグループでは、皆で実行すべきことを町に対して呼びかけたり、“主婦と政治グループ”は、全回を通じて一人の助言者に依頼して学習を続ける、といったような工夫が見られている。

この時期から、まだ一年だけの学習グループをこわして、また新しく始めることは無理だから、グループを永続きさせて学習を深めたい、という傾向が生まれてくる。

その先駆的役割を果たしてきたのは、都立青梅図書館の移動図書館（むらさき号という自動車文庫）を中心に、学級を開いてきた鍋カ谷戸読書会である。四十四年にその十周年をやったから、すでに三十四年からはじまっていたと言える。

このグループへは第二小学校の先生方がコツコツとその助言の労をとってきてくれた。このような型で、自主的なグループに学校の先生方が加わってくれている例は珍しいし、そのことが息の長い学習活動を続けてこられた一因だと思う。

三十八年のグループから生まれてきた学習グループの中には、今日まで続いている“ひこばえ”“月曜会”等があり、更に“あゆみ”グループなどがある。また、熊川団地で（四十年だと思ふ）開いた婦人学級“幼児教育”のグループは、親と子の読書運動（子どもに良い本を読み聞かせ、

それを基本に親も子も学習する）につながってきている。

考えてみると、延べ五千人ぐらいの婦人が、婦人学級で何らかの学習をしたということになる。それがその時だけのものではなく、その後の生活の中に何かを残してきている。だからおかあさんたちの真剣な学習はもっともっと輪をひろげたいと思う。

それにしても、週一回のグループを二つも持つと、もうほかに何もできない。そんなわけで、もっともっと子どもがお手伝いしなければならなかったのに、と思ったグループがいくつもあった。何かそれができるような条件（場所も人も）をつくりたいものだ。

家庭教育学級のお父さん

家庭教育学級は、昭和四十年からはじまった。もともとお父さんの学習の場をつくること、家庭教育の崩壊がさまざまに問題にされたこと、などが契機になっている。

家庭が大事だという意見は多い。しかしその中で、私たちは何を考えるべきで、どう行動すべきなのだろうという点になると、思うようにいかない、というのが現実ではないだろうか。

家庭にはそれぞれの家風があり、すべて共通ではない。したがって、自分の家庭にすばらしいものを創り出して行けばよい。そのために考えてもらいたい基本的な事項を、お互いにつかもうということが目的だった。

参加されたお父さんは全部で三十人ぐらいだった。圧倒的にお母さんの方が多かった。しかし何人かのお父さんが学級が終わった後で話していた。「親は子の鏡であり（精神的離乳の前までのこと）、しかも社会的ルール（文化）の伝達者としての父親の役割の重要性を知って、自分をつくることが、結局、家庭教育の基本となるのだ、ということを知ることができてよかった」ということばを聞いて、やってよかったと思った。毎週一回ずつ計十回も、夜間寒い部屋の中で聞き話しあった光景が、目のまえにうかんでくる。

家庭教育は混乱しているといわれる。そこで、この学級では子どもの社会化に視点をすえて、パーソンズという学者の『ザ・ファミリー（家族）』という本の理論を一貫して使ってきた。それはこの理論を土台にすえて、自分の家の家庭教育を考え直し創り出してもらおうということからであった。

また一小のPTAが、これと積極的に取り組んで、大野達夫会長が休まず出席されたこと、小林先生が努力してくださったことなども思い出される。そしてこの学級に来たお母さんたちが、一小のPTAの役員として大いに活躍している、などと聞いて、よかったなあと思う。

夜、寒い中で参加してくれた皆様のために、一回一回をどれだけ充実させられ得たか、を反省しているが……。

一回の講演会も問題提起としては意味がある。しかし、私たちの日常からすれば一つの問題を

徹底して継続して追求することが非常に大切だ。

私はいつの日か、いつ来てもそんなことを学べ、研究しあえる場がこの町の中にできたらいいなあ、と常に思っている。

（福生市教育委員会社会教育主事）

福生の婦人会

この記録は、元婦人会役員や、一般市民などから聞きあつめて、まとめさせてもらったものである。

（記録） 山崎茂男

「婦人会は、明治・大正の頃は愛国婦人会といって、中流階級以上の婦人が、年一回青梅で総会をする程度で、仕事としては、お金を集めてそれを本部におさめ、総会るとき本部から著名な氏が来て講演をする程度であった。

大東亜戦争に入って、名称も国防婦人会と変更、その目的も、銃後を守るということに置き換えられ、会員も強制的に多数になり、負傷兵の慰問、また、出征兵宅の手伝い・慰問袋の作製、遂にはバケツリレー・軍事教練等にまで発展し、大変な多忙ぶりであった」

（『福生町誌』より）

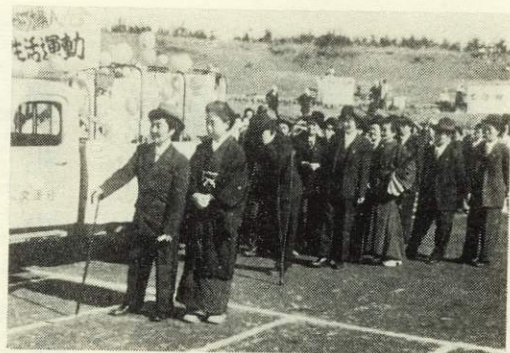
- 一、慰霊祭の開催
- 一、公明選挙に対する諸対策
- 一、未復員者家族慰問
- 一、新旧支部長で優良町村視察
- 一、公衆衛生座談会
- 一、敬老会
- 一、編物、料理講習会

内の婦人会員が結束して、その文化、家庭生活向上をめざすよりどころとして、この会館建設をはかった。そのために会員は石鹼の販売などをして、わずかずながら広くからの資金を積み立ててきた。

会館の活用目標としては、

社会生活学級の開設——編物、料理等の学習、相談部をおき、一般法律、結婚、内職、家族計画の相談等にあたった。しかしこの相談部は長く続かなかった。生活改善のためにと、この会館内に結婚式場を設けた。簡素にして厳肅な挙式を提唱し実行した。参考までに、料理の値段は、一人当たり二百五十円、写真もキャビネ三枚一組九百円であった。

三十年度の総会において提案し、賛成を得た新事業は次の件であった。



新生活運動の仮装行列

戦後の婦人会は、昭和二十四年の発足である。この地方の各町村では、これより前に発足して、それに刺激されたように福生も結成に動いていった。この辺の事情については、後頁に鮎沢美代子氏の手記があるので参照されたい。初代会長は鮎沢美代子氏であった。結成時、そのあり方、そして進め方について、米軍（進駐軍）と、国の当局からの指導がなされた。

二十六年には一般町民の生活改善にとりくんだ。その第一は結婚式の簡素化であった。従来この地の結婚式には、その衣裳のみせびらかしのようなこともあったので、それら華美なものの全廃をよびかけた。そしてかなりの改善がなされた。

また、PTA等諸団体によびかけて、都からの指導者について、民主会議の進め方などを学びあった。また、各地区の組長さんたちからの意見をまずとりあげて本会を運営していくので、会員すべてにはりが感じられるような運営を心がけた。

二十九年の十二月一日に、西多摩婦人生活館が牛浜に開館された。この数年前より、西多摩郡

このころ、会の運営資金のために、町の健康保険料や国民年金の徴収を、町から引受けて、その手数料を本会運営費の一部としていた。しかしその使途について、しだいに本部と支部とのくいちがいができ、その点で婦人会運営の一つの問題点が生じてきた。

三十五年度の福生町婦人会は、二十二支部で会員千三百名の組織であった。

三十七年には、婦人会は婦人学級ととり組んだ。社会福祉、子どもの問題、婦人と政治などに、この学級が真剣な学習を続けた。子どもの問題では、青少年問題協議会などへの補助金の増額を、また政治では、町会議員の定数は正などで議会への発言も活発にやった。（社会教育のあれこれ参照）

そのころまであまり波風もなく進んできた婦人会運営も、何かしらさざ波がたち始めてきた。

四十年ごろから支部の解散、脱会もでてきた。若い主婦層に共働き家庭がふえた。まず、役員を受ける者がなくなってきた。国保などの集金は真っ平ごめん、ということからも役員を逃げられた。婦人会の中味に、若い人の要求するような魅力を感じさせるものも少ない。

かつての会員の考え方と、若い人のそれとが根本的にくいちがいを生じてもきた。一部の人の考え方もしれぬが。

会のためというなら、自分のつごうがあってもそれを次にまわして、会のつごうに合わせて活動してくれたのが、かつての会員であった。

まず自分のつごうをもちだし、それでだめなら会のことはどうでもよい、という新しい会員の考え方が一部に見られてきた。

婦人学級にしても、長年の会員にとっては、より高度の婦人学級を願うことになる。そして一般学級生との感情問題もそこから生じることもあった。

極端にみるならば、戦前の一部有産階級の奥さん方の交際機関であった婦人会が、戦後は、その生活苦の中で、踊りと旅行などを通じて婦人たちの何よりの憩いの場であった婦人会。

それが、社会のおちつき、時代の進展で、新しい婦人活動のよりどころとして大いに期待された婦人会となった。戦後強まった婦人の地位に目覚めて会員は力を結集し、大いにその向上を一般に認識させたものである。

しかしこの町であって、四十二年の青年団解散の事態から考えても、これら団体活動のすずめ方の困難さは、時代とともに必然のもののように感じられる。今後の福生市婦人会の健闘を切に願うものである。以下、戦後会長氏名を記す。

鮎沢美代子（二十四・二十五） 榊 マツ（二十六） 野島カヤ（二十七） 田村静子（二十八） 野島カヤ（二十九・三十一） 町田キク（三十二・三十六） 志村立（三十七・三十八） 今野つよ（三十九） 小倉千恵子（四十） 中村初乃（四十一・四十二） 竹島子女（四十三・四十四） 木村貞子（四十五）

婦人会の発足と

婦人町議のころ

鮎 沢 美 代 子

昭和二十三年のまだ春浅い三月二十八日に、戦時中から疎開していた小宮村から、熊川の家に越してきました。

まだ、戦後間もなかったころで、このあたりからはるか国道を走る車さえも見え、広々とした畑が続いていて、どんなにかのんびりしていたものです。あれからもう二十数年たって、いまは見渡す限りの、家また家になってしまいました。

そのころには、どこの町村にも婦人会ができてそれぞれの活動をしていました。ところが、福生町にはその婦人会ができていませんでした。

当時、町の助役だった斎藤吉太郎氏が、各部落から二、三名ずつの婦人を役場によんで、婦人会をつくる話しいの会を開いたのは、二十四年の四月始めだったと思います。それから二、三回集まりをして婦人会が発足することになったのです。

会長をきめる段になって、はじめ名前があがった方の所に大勢でお願いに行きました。そちらではご主人のつごうで駄目だとすぐお断わりをされていました。そのとばかりが私へくるとは夢にも思っていないでしめたのに、皆さんはその後私の家へこられました。とてもそんな大役は引受けられないと堅くおことわりしました。ところが、平素人の好い亡くなった主人（文学博士、鮎沢信太郎氏——編者註）がかってに、お受けさせますというような返事をしてしまい、とうとう会長ということになってしまいました。

それからはまず会則づくりから手をつけて、徐々に形をつくりました。なにかもはじめてのことではそれは大変でした。当時、進駐米軍や国からのよびかけがあつて、婦人会のあり方などについて指導がありました。役員はそれに出席して勉強し、また郡の連合婦人会とも交流して見聞を広めました。

その年の行事として、戦争で亡くなられた方たちの慰霊祭をやりました。熊川の千手院と福生の清厳院、長徳寺と三回にわけ遺族会と合同で行ないました。そのころは、町としては慰霊祭はできない時代でしたので、皆さんには喜んでいただきました。

また、青年団と話しい、お互いに町の発展に協力しあいました。

二年間、会長として何のなすこともなく過ぎ、次の榊マツさんに会長を引受けていただきました。

婦人会を退きましたら、町の議員に立候補を、とおすめがありました。とてもお役にはたてまい、と思いながら主人と相談しましたが、とにかくお受けをしました。そのころの選挙は、部落推薦の出馬というのがほとんどでした。私もその形となり、皆さんがすすんでポスターはりをしてくださったたり、一生懸命働いてくださいました。

選挙も終盤になるというので、どうなることかと心配しましたが、終始何をやっていいかわからずに過ぎました。青年クラブで立会い演説会があり、出席して意見を述べましたが、候補者もわずかの方しか出席しなかったようでした。そして、とうとう皆さんのお陰様で当選させていただきました。

他の町村でもこの二十六年には、三田村から小沢マス、五日市で今川アヤヨ、平井村で宮林キヨさんたちが議員に当選しました。

婦人議員として私の忘れられない思い出の一つ記してみます。

終戦後、福生町は基地の町となり駐留軍相手の女性がふえました。そして、その間にできた子どもが、大勢いたのです。そのことで、横田基地の大佐で、そうした子どものことを大変心配してくださった方がいました。孤児収容施設を造ることにとても熱心でした。当時の森田幸造町長も一生懸命でした。そのころ有名な大磯のサンダースホームの見学にも行かせてもらいました。また町長と一緒に、阿佐ヶ谷にあった孤児施設を見学に行き、いろいろ考えさせられました。そ

して福生にこのような施設をと決意しました。

基地の奥さん方ともお逢いして、資金の面やら協力を依頼し、まず孤児を集めなければと、町の中は申すに及ばず、羽村までも尋ね歩きました。そして、資金は横田基地の兵隊さんたちの協力などで、多摩橋のそばに、立派な建物ができたのは昭和二十六年だったと思います。

何人かの孤児が収容され、クリスチャンの某さん夫婦が、献身的に働いて下さいました。二十年たった今、あの建物はあとかたもなく、そこに明かるい市民プールができて賑やかな様子を見るにつけ、私にとっては淋しい思いがしてなりません。

その他、赤線の問題がありました。当時何千人といった接客婦の病気などの問題等、なかなか面倒なことでした。

この一期だけで私は議員を退きました。この町ではただ一人の女性として、町会議員のお仲間になり、初めは何もかも夢中に過ごしました。それでも四年の間大過なく任を勤めさせていただけたのは、男性議員の皆様や、婦人会の仲間たちのご援助のおかげでした。

ふた昔前のことで記憶がいも心配されるお話で申しわけありません。あえて申しあげたいことは、その後に続いてくださる婦人議員がこの市におられないことを残念に思っております。この地ではPTA会長さんいまだに女性では出ておられないようです。

男と女のこの世の中です。なにもかも、男も女もちつもとたれつで福生市のよりよい発展が続

くものであらうと考えている、昨今でございます。

(福生市母子福祉会長)

“子どもの意見”

大 根 足

中二 女子

女子には大根足の人が多い
それを体育の時間などに
ひやかす男子が多いけど
あまり体の方が太くて
足の細い人よりは
足の太い人の方が
人によっては
つりあっていていいと思う
太いなんていうより
安定性があって
いまの時代に
心強くていいと思うけど。

(『ふっさっ子』第一集より)



西多摩郡バレーボール・野球両大会に優勝した福生青年チーム、昭和29年